

氏名	鴨藤 祐輔 (学籍番号 16DR02)		
学位の種類	博士 (リハビリテーション科学)		
学位記番号	28号		
学位授与年月日	2020年3月12日		
論文題目	6ヵ月以上就労・就学をせず社会参加していない精神障がいのある当事者が体験を語ることによる自身の捉え方の変化過程		
論文審査担当者	委員長	柴本 勇	教授
	委員	大城 昌平	教授
	委員	藤田 美枝子	教授
	委員	新宮 尚人	教授
	委員	田島 明子	教授

## 論文要旨

**【研究目的】**精神障がいのある当事者は、深刻な社会的排除の影響を受け否定的な自己評価をするようになり、社会適応障害と不適切な対処行動の結果として社会参加ができなくなってしまう可能性がある。精神障がいのある当事者に対する自身への否定的な捉え方に対する介入は、グループでの介入プログラムが中心で、グループセッションに入ることに困難さを抱える6ヵ月以上就労・就学せず社会参加していない精神障がいのある当事者への報告はあまりみられていない。そこで、本研究の目的は、6ヵ月以上就労・就学をせず社会参加していない精神障がいのある当事者が、体験を語ることを通して自身の捉え方どのような変化過程があるのか明らかにすることを目的とした。

**【研究の対象と方法】**研究対象者：精神科外来へ通院または精神科往診を利用している6ヵ月以上就労・就学をせず社会参加していない精神障がいのある当事者のうち、本研究の目的・内容を理解し同意が得られた者とした。

調査内容：基本情報、精神障がい者の内面化したスティグマ尺度 (ISMI)、Rosenberg 自尊感情尺度 (RSES)、世界保健機関・障害評価面接基準 (WHODAS2.0)、全般的機能評価 (GAF)、精神障がいのある当事者が自分自身をどう捉えているかに関する半構成的インタビュー

データ収集方法 (図1)：全4回の構成でそれぞれ60～90分程度を週1回ずつ行なった。研究者と1対1で実施したが、対象者が希望すれば、担当している支援者に同席してもらった。第1回と第4回は調査内容の評価を行ない、第2回・第3回は「体験の語り」として過去の経験や現在に至るまでの体験について13のテーマで語ってもらった。

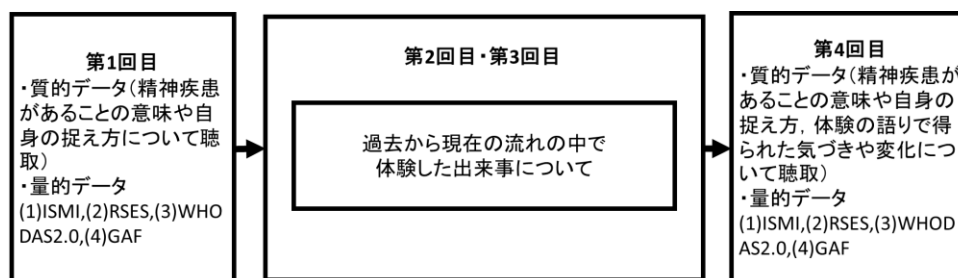


図1. データ収集方法

## 【データ分析方法と結果】

### 1) 第1回目と第4回目の量的データの比較：

ISMI の差別体験の構成要素において第4回目と有意に高かった。それ以外の5つの構成要素と合計得点、その他使用した尺度において有意差を認めなかった。

### 2) 第1回目～第4回目の質的データの分析と量的データ分析の統合 (図2)：

佐藤 (2008) の質的データ分析法を基に第1回目～第4回目で得られたインタビューデータを円環的に繰り返し読み込み、帰納的なコーディングを行ない、第1回目～第4回目のデータから概念コードを生成しカテゴリー化した。対象者個別に捉え方の変化過程を分析し特徴を捉え、その後対象者全体から自身自身の捉え方がどう変化しているか各概念とカテゴリーの関係について検討し概念図を作成した。

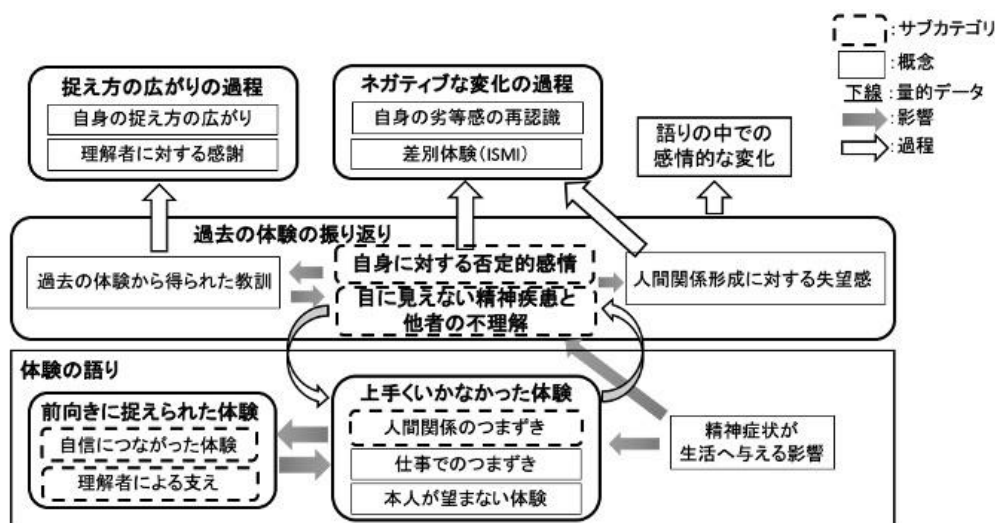


図2. 第1回目～第4回目の質的データ分析と量的データ分析の統合

## 【結論】

対象者は、精神障がいによって一般的な社会のルールから外れてしまったと捉え健常者と比較していたことと、目に見えない精神疾患と他者の不理解による影響から、自身に対して否定的感情を抱いていた。対象者が体験を語ることによる自身の捉え方の変化過程には、対象者にとって人間関係のつまずきといった上手くいかなかった体験の再解釈や捉え直しがどのように行われたかによって3つの過程があったと明らかになった。1つ目は、上手くいかなかった体験と自身に対する否定的感情や目に見えない精神疾患と他者の不理解がループして留まる過程であった。2つ目は、上手くいかなかった体験と前向きに捉えた体験の相互影響から、過去の体験から得られた教訓として捉え直すことによる捉え方の広がりであった。3つ目は、精神症状が生活へ与える影響や上手くいかなかった体験に対し、自身に対する否定的感情や人間関係形成に対する失望感として捉え直すことによるネガティブな変化過程であった。これら3つの変化過程は、どれも上手くいかなかった体験の捉え直しが中核となっていたと考えられ、対象者が前向きに捉えた体験があることが上手くいかなかった体験の捉え方に広がりを与える助けにつながるものと考えられた。

対象者の特性を踏まえ、これまでの人間関係のつまづきによる心理面に留意しながら個別セッションを行うことによって、対象者は過去と現在の自身を比較し、自身の捉え方や理解者の存在について内省することができ、自身の捉え方が広がる過程につながるのではないかと考えられた。

## 論文審査の結果の要旨

精神障がいのある当事者に対する自身への否定的な捉え方に対する介入は、グループセッションが中心で、個別セッションによるアプローチの報告はほとんど見られない。本研究は、グループセッションが困難な、6ヵ月以上就労・就学をせず社会参加していない精神障がいのある当事者が、体験を語ることを通して自身の捉え方にどのような変化過程があるのか明らかにすることである。

対象者は自身に対する否定的感情があると捉えており、目に見えない精神疾患と他者の不理解があると受け止めていた。4回の語りを通して、自身の捉え方の広がりや理解者の支えに対する再認識があった一方で、自身の差別体験が惹起されネガティブな感情も示された。

本研究論文の審査においては、個別セッションの語りから得られたものは何か、ネガティブな変化をどのように捉えるかについて質問された。語りの利点は、内省による自己理解の契機になる一方で、自身の体験を振り返ることになるため、劣等感や他者の不理解というネガティブな感情が惹起された可能性があったことなどが説明された。

上記の結果より、本博士論文は、グループセッションでのアプローチが困難な対象者に対して、内省を通じて自己理解を深めるための新たな手段として臨床的意義が高く、今後、更なる検討によっては、訪問支援等で広く応用されることが期待できる。

以上を統合すると、鴨藤祐輔氏の論文は、今後の臨床活用への期待と共に、作業活動を治療・介入手段として関わる作業療法の意義と効果を示す一助になると考えられ、精神科作業療法のさらなる発展にも期待がもてると評価出来る。よって本審査委員会は、本論文が著者 鴨藤祐輔氏に博士（リハビリテーション科学）の学位を授与することに十分な価値あるものと認めた。